

## 書 評

伊藤清司Ⅱ監修・解説／磯部祥子Ⅱ翻刻

## 『怪奇鳥獸圖卷』（工作舎刊）を読む

枋 尾 武

神話・傳説の研究で名聲のある伊藤清司氏の監修・解説と本學大學院で國文學を専攻修了して、民俗學研究所研究員を勤める磯部祥子氏翻字の本書が工作舎から刊行された。誠に時宜を得た出版と言える。

本書は異鳥獸・異人物を中心に七十六種の個體が圖鑑風に作圖されたもので、最初は墨線のみで描かれたもの、後に着色されたものかと考えられる。圖卷の形式を採るこの種の圖録は中國の宋以降特に明・清の頃盛んに作られ輸入もされている。この圖卷も日本の

獨創ではなく中國製の原圖卷が存在し、これに畫と讀文があつたと考えられる。これを江戸前期頃あまり教養の高くない畫僧か繪師が讀文を和譯し、繪は和風を加味して描いたと考えられる。その譯文は吳音による讀みを混えた稚拙なもので、鳥獸等の名稱を誤讀し、また誤譯している。詳細については評者が別に用意している「成城大學圖書館藏『怪奇鳥獸圖卷』における鳥獸人物圖の研究稿」（『成城國文學論集二十八輯』）を見ていただきたい。これはあくまで假説であるが「原怪奇鳥獸圖卷」

の存在を認めたとして、その典據とした書物ないしは圖録は何であるかを考えることが前提になる。この圖卷を目にして最初に頭に浮ぶのは『山海經』である。この書には明の胡文煥の『新刻山海經』の附圖（以下圖本と略稱、『格致叢書』所収、明・萬曆二十一年へ一五九三）我が文祿二年刊）を始め『山海經釋義』の附圖（萬曆二十五年へ一五九七）、我が慶長二年刊）や和刻本『山海經』附圖（江戸前期刊）の原本たる明刊があり、これ等に附された繪圖が江戸博物畫に多大の影響を与えた。

工作舎版圖卷に影印された清の汪紱（わうふう）の撰になる『山海經存』九卷（光緒二十一年へ一八九五）、我が明治二十八年刊）は圖卷には影響は與えていないと思うが、面白い圖柄である。

さて多彩な異鳥獸は江戸時代の人々の興

味を引いたが、原圖卷の典據は何かと言うと後に述べるように圖卷七十六圖中七十一圖が一致する胡文煥の圖本と六十五圖が一致する『三才圖會』（以下圖會と略稱 明・萬曆三十七年へ一六〇九）、我が慶長十四年）及び、前記の明刊の山海經圖と『大明一統志』等が材料となり創作されたと考えられる。

今回出版された圖卷は色彩も程良く、簡潔な解説と翻字が施されているので、讀者にとつて心地良い讀後感が得られる。また、この作品に採用された不思議な鳥獸圖も讀者の興味を引く。ただ一言意見を申すならば、解説の典據の大部分を現行『山海經』に求められたために未詳とするものが多く出た。これを圖本や圖會、『大明一統志』あるいは『本草綱目』等を参照するならばほとんど未詳とすべきものはない。また翻字は正確であるが、典據の選定が誤つたため、二三の

誤讀があるが、さして問題にならない。それよりこの圖卷の公刊が江戸博物學研究に貢獻すること多大であることを強調したい。決して樂でない解説を引き受けられた伊藤清司氏とめんどろな詞書の翻字をした磯部祥子氏の苦勞を思い、この書が多くの人に讀まれることを願う。ここに至つて、圖卷の主要典據である胡文煥の圖本と王圻の圖會の中、圖本を中心に圖會と對照させながら、簡単な考證を附して責を果したい。その他の考證は別に書いた論集の論に委ねたい。なお今回は現行『山海經』に見えぬものに限定した。

### 『怪奇鳥獸圖卷』の典據考證 胡文煥の『新刊山海經』 に附する山海經圖

『山海經』圖の現存するものの中では

古い部類に屬する。『本草綱目』はこれより前にできたものであるが、網羅的に集圖したものではない。圖卷の七十六圖のうち六十五圖が共通している。このうち現行『山海經』に見えぬ圖は圖卷の番號で示すと 2 鸞鷟、19 玄鶴、31 白澤、41 赤狸、45 貳犬、53 貳火獸、56 首耳、64 青熊、69 玄豹のほかに 74 人（狒狒）、75 獾、76 龍馬の十二圖である。このうち 2 鸞鷟は現行本『山海經』は鳳凰である。兩者は同族の鳥である。古い『山海經』にはこれらの文と圖が存在したのかも知れぬ。

圖卷は胡文煥本の『山海經圖』と『三才圖會』と『山海經釋義』の系列である明蔣應鑄畫になる『山海經圖』（同 江戸前期和刻本）を參考にしたと考えられる。畫風は狩野派、應舉の傳統を繼承した江戸博物畫の中にあるが、これは別の機會に譲りたい。次に各圖

について他資料と比較検討する。

## 2 鷺鷥

この鳥は「南山經」の「丹穴之山」に居ることになっている。「丹穴山有鷺鷥者、鳳之屬也」(圖本、圖會)と。

現行本「山海經」「南山經」では「丹穴之山(中略)有鳥焉、其狀如雞、五采而文。名曰鳳皇、云云」とする。「本草綱目」の鳳凰の集解における李時珍の注に「山海經」を引き、續いて「甯蔡衡云く」として「衆鳳有四、赤多者鳳、青多者鷺、黃多者鵠、紫多者鷺鷥、白多者鸛鷀」とする。圖卷の圖柄は鷄に似ているが、これは「山海經」の「如雞」を受けている。雛形は圖本か圖會であろう。「古今圖書集成」の鳳凰圖は官廷で六十組作られ市販されなかった事情から考慮して使われていないであろう。

萬曆十八年(一五九〇) 日本 天正十八年)刊の「本草綱目」は日本においては寛文九年(一六六九)版が出ており、圖卷の作者は見ることでできたかも知れない。

## 19 玄鶴

この鳥は圖本、圖會、「本草綱目」(鶴)等に見られる。圖本、圖會に「雷山有玄鶴者、粹黑如漆。其壽滿三百六十歲、則色純黑」とする。圖本か圖會が雛形であろう。

## 31 白澤

白澤は圖本と圖會等に見えるが、現行「山海經」に見えない。圖書集成は圖會を典據としているので、圖卷の典據とする圖は圖本か圖會とに限定され

る。綱目には見えるが上の二本が主典據であろう。別のところで述べるが29の蜃蜃と記す蛇の一種は肥遺蛇ないしは肥遺と書くのが正しい。ところが圖本と圖會は蜃字と書いていることに注目すべきである。

## 41 赤狸

圖卷の圖の鳥獸は左を向き、他の資料の圖が右を向いているのは圖卷が右から左へ向って描かれているからであろうが、少し氣になる。この圖も31と同じく圖本と圖會が圖卷の典據である。

## 45 貳犬

圖卷は勲大と誤記誤讀している。圖本と圖會が圖卷の典據である。「くたい」という讀みは明らかに誤りである。こ

のような例は少くない。

### 53 厭火獸

この圖も現行「山海經」には見えない。圖本と圖會が典據である。圖卷の厭火獸は圖會等に見える屏翳に似ており疑問が残る。ただし「厭火國有獸、身黑色、大出」中云云」という文言には矛盾しない。

### 56 酋耳

圖卷の「しうに」という讀みは呉音である。綱目の虎に附するのは「瑞應圖」による。圖本、圖會に「英林山有酋耳（中略）尾長於身。食虎豹」とある。綱目引くところの「瑞應圖」に「酋耳似虎絶大。不食生物。見虎豹。即殺之」とする。仁獸とし

ての酋耳である。

### 64 青熊

圖卷は青熊と書いて「せいゆう」と讀ませている。誤寫である。圖本、圖會には「青山中有青熊者。周成王之時、天下太平。東夷之人屠何獻也」と記す。この記事からは青熊の姿を讀みとることができない。圖卷の圖は猴ないしは猿である。圖の誤りであろう。現「山海經」には見えず。

### 69 玄豹

圖卷「げんしう」と誤讀。圖本と圖會に「滲肥澤有玄豹與貉同」（補注は酒であろう）とあり。豹と貉同意、「ムジナ」。圖本と圖會が難形。

### 74 狒狒

圖本、圖會は狒狒を「如人」とする。圖卷は兩書と同じ出典。圖本、圖會に「東陽國有寓寓。爾雅作狒狒。狀似人黑身。披髮云云」とあり。圖書集成は「山海經」を引く、北山經の獄法之山の山獠を狒狒とする説を採るが別物であろう。「本草綱目」も同説を採る。典據は「東陽國」が圖卷と圖本、圖會に共通した典據と認められる。

### 75 獭

圖卷の獭と圖本、圖會、圖書集成との印象は異なるが、獭を知らぬ當時の日本人は空想をふくらませたのであろう。典據は圖本と圖會であろう。「南方山谷中有獸。名曰獭。象鼻厚目、牛尾虎足。身黃黑色、人寢其皮辟瘡。

圖<sup>ズ</sup>其<sup>ノ</sup>形<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>辟<sup>クル</sup>邪<sup>ヲ</sup>云云」とあるので圖卷が最も忠實に再現している。

## 76 龍馬

圖會とそれを受けた圖書集成の圖がよく類似している。圖本は圖卷の雛形にはならないであろう。「孟河出<sup>ス</sup>龍馬<sup>れうま</sup>者<sup>ハ</sup>仁馬<sup>ナリ</sup>也。高八尺五寸。長頸<sup>くび</sup>。膊上<sup>わき</sup>有<sup>ニ</sup>翼<sup>アリ</sup>。旁有<sup>ニ</sup>垂毛<sup>アリ</sup>。蹈<sup>ふシテ</sup>不<sup>レ</sup>没<sup>セ</sup>。云云」とある。「有翼」というところは圖本と圖卷が共通している。圖卷は圖本と圖會との合成圖と言える。

以上をまとめてみると、圖卷の典據の多くは圖本と圖會を基本にして「本草綱目」等を用いたと考えられる。尚、10長尾鶏、47福祿(馬)等は「大明一統志」に、11馬鶏は「見物」に、49吼は「茶餘客話 獅吼」に見える。前記「論集」二十八輯を参照されたい。

(とちお・たけし 成城大学教授)

(工作舎、二〇〇二年一月刊、三二〇〇円)